

交ダンスの他に、帆船模型づくりと多趣味であった。いつかお会いした時に、定年退官後は、好きな帆船模型づくりでもとおっしゃっておられたことが思い出される。

今頃は、夢の帆船に乗り組んで、真綿のような新雪で覆われた雪原を駆け巡っているのではないだろうか。遙

か彼方には、中谷先生や孫野先生が、最近の雪の結晶成長や、水の物性研究のニュースを待っているのではある。御冥福をお祈りするのみである。

(北大理学部 菊地勝弘)

小林禎作博士と Imperial College の思い出

北海道大学の低温科学研究所教授の小林禎作博士は去る3月8日に他界された。彼の経歴の詳しい記述は別の人にゆずるとし、小林さんと私が1950年代後半から1960年代前半にかけて、London の Imperial College で物理から独立し、新しく Department of Cloud Physics を開いた B.J. Mason 教授の下へ研究留学した唯2人の日本人研究者だったという関係上、彼がそこで雲物理の仕事をした時代の面影をこの折に追悼の意味を込めて紹介する。

その頃小林さんは北大、中谷宇吉郎教授の指導の下雪の結晶の習性を調べていたが、第二次大戦後彗星の様に現れ、雲物理の研究を強力に推進しかけた Mason 教授の所で同じテーマについて実験するため渡英した。Mason 教授の研究室および事務室は小林さんが渡航された当時まだ South Kensington の Imperial College に所属する物理学教室にあった筈であるが、その後広い Exhibition Road を隔てた 10 Princess Gardens にある地上3階地下1階の古い大きなアパートの一部へ移った。私が後で行った時でもそこにあった装置はほとんど全部手造りで、数もあまりなかった。そのためか、小林さんは北大から顕微鏡等を持って行ったと聞いた。彼の渡航は私より2年ほど先で、現在雲物理の分野で活発な J. Latham (Univ. Manchester Inst. Sci. and Tech.), J. Hallett (Desert Res. Inst., Univ. Nevada) や J. Maybank (Canada) がいた筈である。しかし私が着いた1961年にはそれらの学生は全部卒業して出てしまっていて、P.V. Hobbs (Univ. Washington), G. Bryant (British Meteor. Office) 等が学生やら助手として居り、後に H.W. Georgii (Univ. Frankfurt), L.F. Evans (C.S.I.R.O., Australia) 等外国から来訪する研究者も加わり賑やかになった。

小林さんが帰国してしばらく経った頃私は就航して間もない Pan American 社の Boeing 707 ジェット機で南廻りの長航路を London に向かった。London に着

いて小林さんがずっと滞在していた下宿を紹介され、そこで厄介になることになった。同じ部屋を当てがわれたが、北向きで道に面して薄暗くうら寒く、暖房は電気だけ、1 shilling を入れると1時間程度持つといったもので、小林さんはよく辛抱されたと思った。私は3カ月足らずで出てしまった。

下宿の小母さんは London の下町 (cockney) のアクセントで話し、小林さんの名前が“テイサク”であるから、それを縮めて発音したが“テイ”ではなくまことに“タイ”であった。Today の発音は to die と聞えたとし、a と i の区別は全く無かった。彼は帰国後もずっと年来の season's greetings の交換を続けたとの事であった。

その下宿から研究室まで例の2階つきの赤バスで約40分かかった。Mason 教授の秘書は Miss Sylvia Woods で、小林さんの世話をいろいろ親切にしてくれたと聞いた。その当時 London の中心街で日本人旅行者に出くわすことは減多になかった。博士課程の学生で私と親しかった Hobbs は彼女と婚約し、結婚の費用が要るので車を売りたいというし、私も車が必要だったのでそれを買った。中古の Ford Zephyr だった。

小林さんは凝り性の人で、何処々々のレストランは彼がよく行ったところだと聞かされた。私は人の噂には疎いので大部分忘れてしまったが、彼は無口で黙々と仕事をしたようである。“小林は頭の無い男だ”と冗談めかした口調で云われた事がある。それはどういう意味だと聞き返えしたら、水平型の冷凍庫の中に始終頭を突っ込んで仕事をしているので、首から下しか見えないからだとの事であった。研究室には市販の大型装置は見当たらず、装置はいろいろ手造りで、うまいアイデアを組み込んで作ってあった。大部分は学生の作らしく、決して上手と云えるものではなかったが、かつて科学の先端をゆくアイデアを生み、それを手造りの装置で進めた英国の気風がそこに見られた。何でも手造りでゆくことは不可能になってきたし、時間の浪費にもなるが、必要な

時、必要な部分を自分で作ってしまうという気力と能力が問題解決の力となる事は否定出来ない。学生も教授もよく議論した。小林さんの仕事はこういった雰囲気の下で進められたと想像される。

雲物理研究室の前には小じんまりした Princess Gardens があり、日射のある時には楽しい散歩の場所を与えてくれていた。South Kensington には Natural History Museum, Victoria and Albert Museum, Science Museum があり、内容は充実していて入場料はすべて無料であった。Exhibition Road を South Kensington の地下鉄駅から逆に辿ると Hyde Park に行き当たるが、そこにも草花の繁る、よく手入された散歩道が幾つかあり、ベン

チが適所に配置され、老人の日なたぼっこが目立った。大学の人もよく散歩していて、科学と教育に適した環境であった。その公園の南側に Kensington Road を隔てて円屋根の Royal Albert Hall があり、オペラがよく催された。小林さんはよく通つたらしい。

英国人は保守的である。物事を凝って掘り下げる人が多い。小林さんも凝り性で渡航前に既にその傾向を示しかけていたが、Imperial College 時代にこの英国と英国人の気風が彼のその後の凝り性の生活や研究態度に強い影響を与えたのではなからうか。

御冥福を祈る。

(ユタ大学 福田矩彦)

日本気象学会国際学術交流基金への募金のお願いと寄付者御芳名 (第12報)

日本気象学会は、かねてから各国の気象関係組織および研究者との学術交流を図るため、国際学術交流基金をもうけて、学会もしくは会員の学術交流の援助を目的とした活動を致しております。実施にあたっては、外国で開催される国際学術研究集会への会員の出席の補助、国際学術交流に貢献する事業の援助などです。

本来この基金は、少なくとも一千万円程度の元金がありますが、その利息で活動費をまかなうことを目標としていますが、現在のところ、その過渡期として、学会自身の年間予算から毎年約百万円を積み立て、並行した、わずかの一般事業費と篤志による個人寄付金で活動を行って

おります。

基金の基礎を固めるためには、是非、会員の皆様からの御寄付をお願いします。理事会としては、さちには大口の団体寄付を仰ぐべく努力致す所存です。国際学術交流基金の趣旨を御理解いただき、12月号挿入の振替用紙を御利用の上、一口千円として、なるべく多くの御寄付をお願いします。

なお、募金期限は昭和62年12月末日と致しますが、早い時期にお振り込みいただきますようお願いいたします。

昭和62年6月

日本気象学会

昭和62年5月31日現在、下記の会員からご寄付がありましたので、お礼を兼ねて報告申し上げます。(敬称略)

記

権田 武彦, エーロゾル研究グループ(代表 北川信一郎), 原見 敬二, 柴田 宣

以上 3名	1団体合計口数	105口	105,000円
累計118名	1団体総口数	968口	868,000円
62. 5. 31 現在	国際学術交流基金額	5,000,000円	
	(うち配当金	158,683円	基金繰入)